

傘の文化史

傘は元来、洋の東西を問わず日よけとして上流階級が用いた道具だった。雨傘の歴史は約500年と意外に浅い。外観と機能が洗練され、ファッションへと変遷した過程を辿る。

元来の用途は日よけ。18世紀、英国の旅行家が雨傘を広める。 19世紀、細く美しく巻ける傘が生まれ、紳士の装身具に



所蔵 東京国立博物館 Image:TNM Image Archives

↑雨中の大名行列を描いた、歌川広重作「曾海道六拾九次之内 垂井」。ころは江戸後期、番傘、笠、蓑など各種の雨具が混在する。

傘の歴史は、紀元前1200年前後の古代エジプトに始まったというのが通説だ。王族を日射しから守り、ときには傘を天空に見立て、権力者を崇める役目を果たしたという。そうした権威の象徴としての傘の歴史は長く続いた。日本も同様で、飛鳥時代に中国から百済を経由して伝わった傘も特別な持ち物とされ、一部の上流階級のみが使用した道具だった。和傘(番傘)が登場し庶民の日用品となるのは、江戸時代のことだ。

実用品としての傘が登場するのは、16世紀初頭以降のヨーロッパとされる。当初は日射しよけとして使われ、雨傘が登場するのは17世紀後半のこと。雨傘を普及させた立役者として知られる人物が、

英国人の旅行家、ジョナス・ハン

ウェイ(1712〜86)である。

彼は、外国から持ち帰った雨傘を周囲の嘲笑をよそにロンドンの街で差し続け、傘を使う習慣のなかつた人々の間に広めていった。

服飾史家で英国文化史にも詳しい、中野香織さんはこう解説する。

「当時の雨傘は、豊んでも大きく、持ち運びには不便なものでした。それが、細巻きになり、ステッキのような外見になるのは19世紀以降のことです。そこから、傘が紳士の持ち物として認知されていきました。持ち手に装飾を施すなど、傘は服飾文化としても花開いていきます」

1873年には、今も高級傘メーカーとして知られる英国のフォックス社(80ページ参照)が、生地と骨の素材を改良して細くきれいに畳める傘を開発した。実用品としての傘は、外観と機能が洗練されることで、ファッション小物としても欠かせないものになって

解説 中野香織さん(明治大学特任教授)



写真 稲垣純也

↑明治大学国際日本学部特任教授。服飾史家、エッセイスト。ファッション史から最新モード事情まで精通。著書に『ダンディズムの系譜 男が憧れた男たち』(新潮選書)など。

いくのである。

「英国には、傘を細くきれいに巻くことを仕事とする人がいます。お金を払ってでも閉じたときの傘の形を美しく保つことが、イギリス紳士にとって意義があることなのです」(中野さん)

ビニール傘が文化を変えた

日本に洋傘が入ってくるのは、幕末以降のこと。明治になると洋傘の輸入が始まり、1881年(明治14)には、国産の洋傘が登場する。竹と紙で作られた和傘を使っていた人々は、金属と布で作られた洋傘に西欧の先進文化を感じ取った。開いたときの形状から、洋傘はいつしか「蝙蝠傘」と呼ばれるようになった。

手先の器用な日本人は、海外の製品にも負けない美しい作りの洋傘を生み出し、昭和に入ると折り畳み傘やジャンプ傘など独自の機能を進化させていく。

年代	出来事
紀元前 1200年頃	古代エジプトで祭祀や儀式に傘の原型が使われ始める。やがて、権力者を日射しから守るために使われ始めた。
紀元前 1世紀頃	中国の絵画に、位の高い人向けの平らな日よけ傘が描かれる。
古墳時代 3～6世紀頃	古墳から出土した土器(埴輪)に故人の階層を強調する衣笠(日傘)を描いたものがある。
飛鳥時代 6～7世紀頃	中国から傘が伝わる。
平安時代 (794～ 1185年頃)	中国から傘の文化が導入され、貴族の行列などに使われ始める。
鎌倉時代 (1185～ 1333年)	黒く染めた地紙を張った「黒傘」が普及、公家・武士・僧侶などが使い始める。
16世紀初め頃	ヨーロッパにおいて実用品(主に日傘)として使われ始める。
17世紀後半 ～18世紀初頭	イギリスで雨から身を守るための防水性の傘が登場。
元禄年間 (1688～ 1704年)	大坂、京で和傘が作られ始め、「蛇の目傘」と呼ばれる。やがて装飾を排し実用を重視した「番傘」が一般にも普及。
18世紀中頃	フランスの傘メーカー、マリユスが分解式の傘を開発。
1750年頃	英国人のジョナス・ハンウェイがポルトガルから自国に雨傘を持ち込み、独自に改良を加える。
文政年間 (1818～ 1830年)	晴れ間に差す「日和傘」が京坂で流行、幕府や諸藩では贅沢として禁止令を発す。江戸では、雨天に蓑笠ではなく、あえて傘を使うことが粋とされ広まる。
1868年 (明治元年)	オランダやイギリスから洋傘の輸入が開始される。
1873年	イギリスのフォックス社が、親骨を湾曲させて細く畳める傘を開発。次第に紳士の持ち物として定着してくる。
1881年 (明治14)	東京・本所で国産の洋傘工場が設立。
1933年頃 (昭和8)	晴雨兼用傘が登場。
1949年頃 (昭和24)	一部メーカーが折り畳み傘の開発に着手。
1958年 (昭和33)	ビニール傘登場。当時は透明ではなく乳白色だった。
1960年 (昭和35)	ジャンプ傘登場(別名:飛び上がり傘)。
1987年 (昭和62)	ビニール傘の輸入数が国内生産数を逆転。
2000年以降 (平成12～)	ビニール傘の95%以上を中国製が占める。

● 傘の歴史 ※ の地色部分は日本の出来事



© Mary Evans / PPS通信社

● 雨傘を広めた男 ジョナス・ハンウェイ

↑ 傘を差す習慣のなかった18世紀のロンドンで、周囲の奇異の目も気にとめず雨傘を使い普及に努めた結果、実用性の高さが認知される。

『洋傘ショールの歴史』(大阪洋傘ショール商工組合)より



↑ 明治中期の洋傘店の店頭風景。国産の洋傘製造が始まり、婦人・紳士用ともに国内需要が増えていった。
← 世界で初めてビニール傘を開発した『ホワイトローズ』の高級ビニール傘「シンカテール」5000円。親骨にFRP(繊維強化プラスチック)を使用するなど耐久性に優れる。



「傘の歴史を根本から変えたのは、安価なビニール傘の出現です。傘が自分の所有物だという意識が希薄になったのです」(中野さん)
ビニール傘発祥の地は日本である。1958年(昭和33)に販売が開始され、「ビニール」という素材が斬新だった。以後、輸入品が国産品を凌駕する頃から極端に安価になり、「使い捨て」のイメージが定着した。中野さんは語る。「手軽なビニール傘は確かに便利です。政治家などが使う高級ビニール傘(上写真)も興味深い。でも、成熟した紳士なら少しよい傘を持ちたいものです。せっかくのお洒落を、一本のビニール傘が台無しにすることはありますからね」